

# 住環境と街並み保全 次の20年へ

「姉小路界隈を考える会」(京都市中京区)が、28年にわたって取り組んできた住環境を守ることを一体的に「京都らしい街並みを維持する活動」の一環として、この象徴である建築協定が昨年、締結から20年ぶりに範囲を拡大して更新され、新たな次の20年へと踏み出しています。(黒岩有斐)



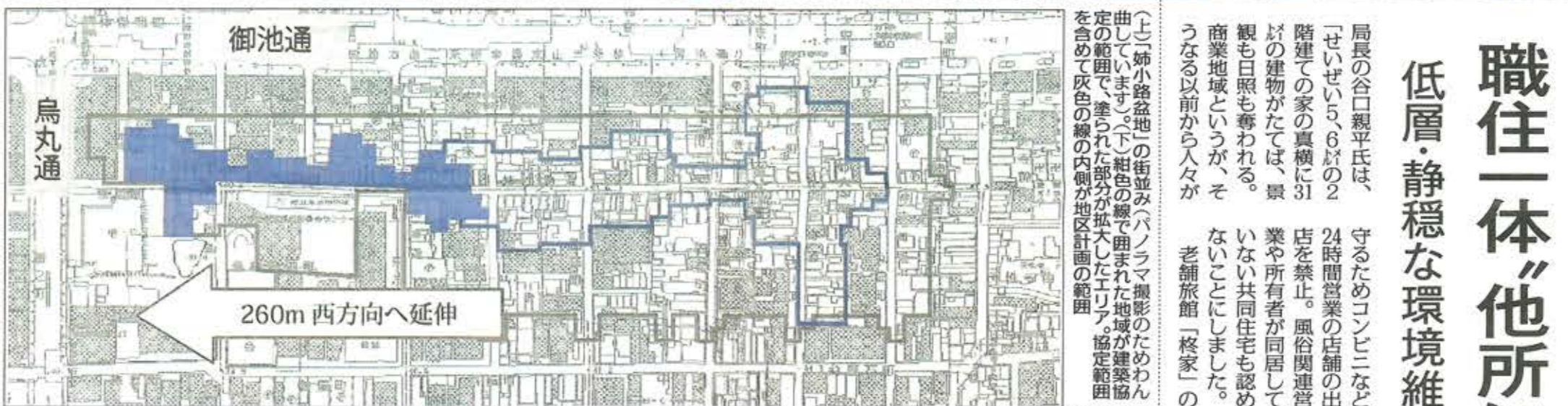
「姉小路界隈を考える会」事務局長

## 谷口 親平さん

京都市は三方を山に囲まれ、幼少期には自宅の物干しから、大文字、東山と北山の稜線も眺望できました。こうした景色を背に、伝統ある旅館や格調高い老舗、それに京町家などの低層住宅が調和した「京都らしい」伝統的な風情が広がっていました。

### 姉小路の良さを守る住民の意思

本だと思っています。昨年には協定の範囲を拡大し、更新となりました。私が当初、予想していたよりもはるかに範囲が広がりました。この過程で、すぐ西隣の町内でも、建築協定によって、街並みと生



局長の谷口親平氏は、「せいで、6階の2階建ての家の真横に31の建物がたてば、景観も日照も奪われる。商業地域というが、それ以前から人々が、老舗旅館「椀家」の(上)姉小路盆地の街並み(ハノ)を撮影するために曲がっています。下)灰色の線が拡大された地域が建築協定の範囲で、塗られた部分が拡大したエリア。協定範囲を含めて灰色の線の内側が地区計画の範囲」

## 姉小路界隈を考える会

## 職住一体〴〵他所にない雰囲気〴〵残したい

## 低層・静穏な環境維持へ「建築協定」更新、範囲を拡大

「考える会の発足から28年。中心メンバーの高齢化もあり、世代継承が課題となっていました。西村氏は「次の世代がこれまでの取り組みにどう意義を感じていていってほしい」と話します。また、西村氏は「この課題は、次の世代がどういう町にしたいかを考える上で、この間の取り組みの成果がその基礎という一つの判断基準になっていければ」と話します。

この20年、町内6割に及び範囲で建築協定を結び、自主的な約束事ではあっても協定に加入していない住民も含めてトラブルは皆無でした。これは、京都らしい街並みと住環境

のより強い担保を得ることもできました。しかし、課題もありました。マンション建設などに伴う地価上昇、近隣でも固定資産税や相続税の値上がりとなり、地元出身の若い世代の人たちが戻り



「京都・まちづくり市民会議」事務局代表、弁護士

## 中島 晃さん

80年代半ばから2000年代初め、中京などで相次いだ高層マンション建設計画に対し、姉小路の住民を含めて反対運動が広がりました。姉小路の取り組みはそれらの中心的なものであり、当時のシンポジウムには経済人も参加するなど、京都の経済界も巻き込むものでした。



京都市に地区計画の要望書を提出する西村氏(左)＝今年3月

突き崩されようとしています。京都市は今年3月、高さ規制を、京都駅南側などで大幅に緩和し、山科区や伏見区の一部で撤廃することを決めました。この規制緩和の流れの中で、姉小路の取り組みは特に重要な意義があると思えます。御池通沿いの山科区や伏見区の一部では対象になりそうですが、なっていないです。

景観行政動かす活動の蓄積 重い税負担の解消も課題に